

ai06s 〜アイノユクエ〜

私は銀河系 N805 第三惑星「メラ」から地球に送られてきた、地球語で言う所の“宇宙人”  
…になるのかな。

でもね、悪い事をしに来ているわけじゃないの。

みんなを守る為に、この地球の平和を守る為に、重要なミッションを抱えてこの星に派遣  
されている。

私の名は『ai06s』。

ジャパーナ名は『ミウラアイ』。

「アイ」っていうのは、この日本にとって最も大切な言葉でしょ？

だから私はこの日本に派遣されたの。

「愛」を込めて、みんなを守る。

みんなに危害を加えようとしている悪いヤツらは、私が許さない！

実は今、この地球上には約 0.02% の異星人が存在していると言われていて、そのほとんど  
は地球の発展を疎ましく思っている星からの使者なの。

たった 0.02% だけど、人数にすると 150 万人。

これは非常事態レベル。そして日本にはおよそ 3 万人が潜伏しているというデータも出て  
いるの。

最近、世界の至る所で物騒な事件が後を絶たないでしょ…これはきっと、その異星人達の  
仕業だと私達は睨んでいる。

だっておかしいでしょ、同じ星に生まれて同じ空気を吸って、こんなに豊かな星の中で地  
球人が地球人を殺すなんて。

ありえないような殺人が、次から次へと発生している。

毎日どこかで、何の罪もない人が犠牲になっている。

こんな私ですら胸が苦しくなるような理不尽な事件の数々。

じゃあ被害者の遺族の悲しみは……？

そんなの、とても計り知れない。

とにかく一刻も早く食い止めないと…このままだと地球人は数年後に滅亡するでしょう。

私は……うん、「宇宙人」だから？ みんなにはない特殊な力を持っていて、異星人を感知  
するセンサーも備わっている。

見た目は普通で驚いてる？

そう、宇宙人も異星人も、見た目は地球人と同じなの。

だからあなたの身の回りにいる人の中にも異星人がいるかもしれない。

地球人の間には『宇宙人はこんな形だ』みたいな情報が溢れているけど、全くのデタラメ  
よ。

これは地球人だけが特別だと思っている証拠。

地球のような星は、銀河系だけで見てもそれほど珍しくない。

だから、宇宙人だって見た目は普通だし、あなた達地球人も、私達からしたら宇宙人であり異星人だし（笑）

…ただ、これだけ発展もしているし、綺麗な星だなあっていうのは思う。

地球人の心もね。

だから守りたい。

リック星人「お前はメラの遣いの者だな？」

コイツはリック星の悪党。

力は強いけどバカだから、私達メラ星の敵じゃない。

アイ「違うって言ったら？」

リック星人「フン、この姿を見ても寝言が言えるかな…ガンゼラ・アルビカーチス！」

アイ「あら、いきなり変身なんて大胆…いいわ、付き合っただけ。」

私も敵と戦う時は変身をするの。

変身方法はとてもシンプルで、この頭にあるゴーグルを下にズラすだけ。

アイ『メラ・リルス・ai06s！』

こんな感じでカッコよく決め台詞を言ってからね♪

アイ「ほら、かかって来なさい。」

リック星人「生意気な小娘が、、叩き潰してくれるわあ！そりゃあああ！！！」

アイ「はああああ、はっ、ええいつ！」

アイ「折角かっこよく変身してもらって悪いんだけど、余計な仕事増やさないでくれる？  
私はアンタ達と違ってとっても忙しいの。絵描きさんだってこの一瞬の為にたくさん時間  
掛けて描いてるのよ！」

リック星人「ぐふっ…くっ、、、貴様はともかく、絵描きのことなんぞ知るか！」

アイ「この地球はね、アンタ達にどうにか出来るような星じゃないの。もう二度と来ないで。」

リック星人「ちきしょう！覚えてやがれっ！」

……とまあ、こんな感じで巡回中に見つけた悪い奴を退治するのが私の任務。  
さっきみたいなリック星程度の相手ばかりなら楽なんだけど…残念ながらそう甘くはないの。

銀河系最大の勢力と言われているのが「プサック星人」。

このプサック星人の戦闘能力がどのくらいかと言うと、一番下っ端の戦闘員でもさっき倒したリック星人の数十倍。そのレベルがうじゃうじゃいる。

幹部クラスになるともう、私もお手上げ。

退治するどころか、私が逃げなきゃいけないよね（笑）

っていうのは冗談だけど、かなり厳しい戦いになるのは間違いない。

あ、ほら。噂をすれば……プサックの信号を受信。

しかもこの戦闘能力の高さは、中堅クラスが2体…

今まで何度かプサックの雑魚は相手にしたことはあるけど、中堅クラスは初めてだわ。

リスクは高いけど、その分得られる情報も多いはず。

地球人のみんなは不安よな。

ミウラアイ、動きます！

アイ「ちょっとそこのお二人さん、お時間もらえる？」

プサック星人①「ほおう、お前はメラの者か。これはおもしろいオモチャを見つけた。」

プサック星人②「メラってことは、コイツを連れて帰れば賞金も頂けるってわけだ。」

アイ「あら、私ってそんなに有名人だったのね～。いいわよ、協力してあげても。ただしギブアンドテイクが条件よ。アンタ達の情報も教えてもらうわ！」

プサック星人①「フン、女一人で我々にかなうとでも？」

プサック星人②「怖いもの知らずのメス豚ちゃんかな。」

アイ「メス豚って……それを言うならせめてラーテルにしてくれない？」

プサック星人①「何れにせよ、お前に勝ち目はない。」

アイ『メラ・リルス・ai06s！』

アイ「何？私が相手じゃそっちは変身もしてくれないわけ？」

プサック星人①「ああ、その必要はない。」

アイ「な、消えた…ッ！？ えっ、う、嘘でしょ！？」

プサック星人②「捕まえたぜ、メス豚ちゃん。」

アイ「くっ…変身前なのにこのスピードって……ありえないんだけど！」

プサック星人①「我々プサックを甘く見てもらっちゃ困るなあ。たった一人でケンカを売ってきたこと、思う存分後悔させてやる。」

アイ「うぐっ！あうッ！！」

アイ「いきなりレディの顔を殴るなんて…とんだ下等生物ね。ガッカリしたわ。」

プサック星人①「敵に女も年寄りも関係ない。力で牛耳るのみよ。」

アイ「あぐっ！あぁッ！！」

アイ「ハア……ハア…くっ……うっ…！」

プサック星人①「さっきまでの威勢はどうした？」

つ、強過ぎる…後ろから羽交い締めになされただけで、全く動けないなんて……

それに、パンチ一発が重い……。

羽交い締めになされていなかったら、きっと一発で倒れ込んでいた。

逆に言えば、何発もらっても倒れることが許されない状況なんだけど。

プサック星人①「とりあえず我々のアジトまで来てもらおうか。ゲルマ司令官にお前を差し出す。話はそれからだ。」

アイ「あがっ！？ かはっ……！」

アイ「ふぐううっ！！」

アイ「か……はっ……」

三発目の腹パンチで、私は意識を失った。

プサック星人①「フン、そこそこ手応えのある女のようなな。」

プサック星人②「ああ、さすが賞金がかかっているだけのことはある。」  
そして私は、彼らのアジトへと連れていかれた。

ゲルマ司令官「やっと目を覚ましたか、勇敢なメラの戦士、ai06s。」

目を覚ますと、プサック星の中堅二人の間に挟まれるようにして、強烈なオーラを纏った男の姿があった。

あの男がゲルマ司令官……このエリアの幹部ってわけね。

ゲルマ司令官「まさかメラの方から我々プサックに仕掛けてくるとは、思わず笑ったよ。  
そういうのを、身の程知らずと言うんだよ。」

アイ「フン、バカね。わざと捕まってアンタ達のアジトを突き止めたまでよ。」

それでも言わないと、私のプライドが許さなかった。

ゲルマ司令官「ほおう、わざと…か。わざわざいたぶられる為に捕まったんだな？この好き者め。」

アイ「す、好き者ってどういう意味よ…」

ゲルマ司令官「それをこれからその身体に教え込んであげよう。」

アイ「きゃッ！？ちょ、ちょっと何すんのよ！」

ゲルマ司令官「フッフッフ…随分ハイレグになってるんだな。」

アイ「くっ…動きやすいように設計されてるのよ。少なくとも、アンタ達のような変態を喜ばす為じゃないから。」

ゲルマ司令官「吊られて地面に足が届いていない今、どれだけの役目を果たせるかな？教えてもらおうか、ai06s！」

アイ「あうううッ！！！」

ゲルマ司令官「どうした？動きやすく設計されてるんじゃないかったのか？フンッ！」

アイ「ああああッ！！うつ…くう……ッ…！」

ゲルマ司令官「それとも、我々を喜ばせる為のハイレグか？」

アイ「はうう…ッ…！！くはっ……ふ、ふざけないで…薄汚い目で見ないでよ！」

ゲルマ司令官「見るなど言われると見たくなる性分だね。おい、やれ。」

アイ「何よ…やめてッ……いやぁッ！！」

ゲルマ司令官「フッフッフ、どうだ？恥ずかしいか？敵を目の前にして大股開くとは、とんだ淫乱ヒロインだな。」

アイ「くっ…放しなさいよっ…放してっ！」

ゲルマ司令官「黙れ、メス豚ぁ！」

アイ「きゃううううッ！！！！くふう……ッ…！」

相変わらず凄い力で抑え付けられ、私は全く脚を閉じることができなかった。  
全開になった股に、容赦無く振り下ろされる鞭。  
スカートを剥ぎ取られて、無理矢理こんな格好させられて、恥ずかしくないわけじゃないじゃない……  
だからと言って、奴らの前で女を見せてはいけない。  
私は精一杯強がってみせる。

アイ「私のこんな姿を見て興奮してるわけ？情けないオス共ね…そんなに見たいなら好きにすればいいじゃない！ほら、好きなだけ見なさいよっ！」

ゲルマ司令官「悪いが…私のレベルだとメラのような低俗のメスでは興奮せんのだよ。だからお前は可愛い部下たちのオモチャくらいで丁度いい。」

アイ「なっ…！」

恥ずかしかった…  
精一杯強がった結果、興奮しないと言われる始末。  
しかも部下のオモチャだなんて……

プサック星人①「そういうことだ。遠慮なく遊ばせてもらうぜ。」

アイ「くっ…やめてよ……汚い手で触らないで！」

プサック星人②「弱いくせに、口だけは達者だなあ。レロレロ〜。」

アイ「んっ、んんう！？……チュッ…いや……ぷはぁ！何なのよ一体！最低っ！」

プサック星人②「最低なのは大股開いてイキってる淫乱ヒロインだろ？」

アイ「くっ…！目的は何なのよ……私をここへ連れてきた目的を言いなさいよ！」

ゲルマ司令官「一つはメラのダークコードを聞き出すこと。それが達成できればもうお前に用はない。殺して欲しければ殺してやる。」

ダークコードとは、メラの核のような物。

その全てはデータ化されていて、ダークコードと呼ばれる暗号で守られている。

地球にはまだ設定されていないけれど、宇宙全体で見れば、ダークコードの奪い合いはよくある話。

そのダークコードを使えば惑星同士の提携もできるし、そのデータを消してしまえばその星ごと抹消される。

最大勢力と言われているプサック星は、銀河系のタークコードをどんどん回収していて、必要な星は傘下に、不要な星は抹消し、その勢力を拡大し続けているという話。

アイ「ダークコードなんて、この私から聞き出せるとでも思ってるの？」

ゲルマ司令官「もちろん、簡単ではないさ。ただ、今夜こうして逢えたのも何かの縁だろう。そして何より、お前はメスだ。それが何より嬉しいんだよ。」

アイ「フン、私なんかじゃ興奮しないんじゃないくて？」

ゲルマ司令官「私が興奮する必要はない。お前さえ興奮してくれればな。」

アイ「それは一体どういう意味…？」

ゲルマ司令官「我々プサックの子孫を残すのだよ。メラの良質な血統でな。選ぶのはお前だ。ダークコードを教えるか、我々の子孫を残すか、二つに一つだ。」

アイ「バ、バカなこと言わないで！どうして私がプサック星人なんて！」

ゲルマ司令官「拒否権はないのだよ。教えないのなら、お前の体を興奮させて、私の体液を注入するのみ。わかってるだろ？我々プサック星人の繁殖力の強さを。」

確かに、彼らの繁栄の原因の一つとして、聞いたことがある。

まるでウイルスのように、体の粘膜に付着するだけで妊娠することもあるみたい。  
例えばだけど…フェラチオをして口の中でその精液を受けただけでも妊娠するとか…。

ゲルマ司令官「そう、お前が興奮して体液を分泌している状態であれば、口の中に出したって妊娠は可能だ。」

アイ「だったら…興奮しなければいいんでしょ。」

ゲルマ司令官「まあ確かにその通りではあるが、それは不可能だ。」

アイ「そんなのやってみなきゃわからないじゃない…！」

ゲルマ司令官「それは…ダークコードを教える気は無い、という返事でOKかな？」

アイ「当たり前でしょ…やれるモンならやってみなさいよ！」

アイ「ンッ…ンフー、んんう……んふっ……ンフー！！」

ゲルマ司令官「いいザマだな、ai06s。」

アイ「んぐっ……んふっ…ンッ……んん`う！！」

ゲルマ司令官「あんなに興奮しないと息を巻いていたくせに、この無様なシミは何だ？」

こんなはずじゃなかった。  
最初は完璧にガードできていたのに、このボールギャグを嚙まされてからおかしくなった。  
ボール部分が媚薬でコーティングされていたの。  
それはまるで大きな飴玉のように、口の中の温度で媚薬が溶け出す仕組みになっていた。  
だからといってボール自体が小さくなるわけでもなく、ほとんど隙間のない状態から媚薬を外に吐き捨てることは困難だった。

さらにその媚薬の効果を促進させる為、体内には電流が流されている。  
頭ではわかっているけど、体の反応を制御することはできなかった。

嘘でしょ、ダメ、止まって！  
こんな奴らが見ている前で、イカされるなんていやっ！！  
お願い、いやっ、、、イクッ！！！！！！

アイ「んふううう`うッ！！！！……ンッ…ンフー、んん`ううッ！」



ゲルマ司令官「ふはははは！想像以上のイキっぷりだなあ。これは面白い。」

ゲルマ司令官「最終確認だ。今のお前の状態であれば、フェラチオだけでも 100%妊娠する。それでもその口でこのゲルマ様のペニスをしゃぶるか、もしくはダークコードを教えるか……さあ、どうする？」

アイ「たとえプサックの子を孕むことになったとしても…私はメラを守る。メラは地球の守護星。アンタ達のような悪党に渡すわけにはいかない…！」

ゲルマ司令官「ならば言うがよい。『プサック星の益々の繁栄を祈念しつつ、ゲルマ様のペニスをしゃぶります』とな！」

アイ「くっ……プサック星の益々の繁栄を祈念しつつ…ゲルマ様のペニスを…しゃぶります……ッ…」

それは今までに経験したことのないフェラチオだった。  
なぜなら、望まない妊娠を目前に、自らの口で射精を促しているのだから。  
このまま射精されたら妊娠してしまう。  
それでも私は、目の前のペニスをしゃぶるしかないの。  
メラを守る為、そして、地球を守る為に。

アイ「んふっ…んっ……チュプッ…んぐっ…………ンッ……んふっ…チュッ……んふっ…  
…」

ゲルマ司令官「何とも言えない表情をしてしゃぶるんだな、ai06s。そんなに妊娠が怖いか？」

私は答えず、ひたすらしゃぶった。

ゲルマ司令官「その表情がたまらんのだよ。正義の為に犠牲になる覚悟を決めた、その表情がな。」

アイ「んぐっ…………ンッ…チュッ……チュパッ…………んふっ……ンッ…んふっ……」

どうせならもっとカッコよく守りたかった。  
相手を倒せないにしても、もっとあるでしょって……。  
それでもいい。  
こんな惨めで屈辱的な姿でも、みんなを守れるのなら。

ゲルマ司令官「さあ、受け取るがいい！我がプサック星の偉大なる遺伝子を！」

アイ「ん、んぶっ！！？」

それは想像していた以上に大量の精液だった。  
口だけでは到底収まり切らず、鼻からも溢れ出す程だった。  
これだけ凄い量なら、繁殖力が強いのも頷ける。

ゲルマ司令官「念の為塞いでおけ。」

アイ「ん、んぐう！？……ンンンッ！！！」

あれからどのくらいの月日が流れたのだろう。  
何ヶ月か、それとも数日か…………。  
それすらもわからないほど、私は絶望の淵にまで追いやられていた。

彼らは私を孕ませるだけではなかった。  
どちらか選ぶように言っておきながら、結局はどちらも手に入れるつもりだったみたい。  
来る日も来る日も拷問を受け、私の精神は崩壊寸前の状態だった。

アイ「ぷはあっ！ はあ、はあ、んう……はあ……ッ…」

ゲルマ司令官「そろそろダークコードを吐いて楽になったらどうだ？」

アイ「ハァ…ハァ……言わない……アンタ達にメラを渡したら、この地球はどうなるのよ。」

ゲルマ司令官「何故そうまでしてこの星を守ろうとする？貴様らメラ星に比べたら随分劣っているこの地球に何を見ている？」

アイ「この星にはね…愛があるの。人の心がある。ようやく最近になってAIが活躍し始めてるけど、きっとこの星は最後まで心を捨てない。  
誰が傷付けば涙を流し、苦しみ憎みながらも前を向き、正義を通す力がある。こんな素敵な星、他にある？」

ゲルマ司令官「フン、所詮は戯言よ。その心が闇を生み、その心が人を傷付け、その心で苦しむのだよ。心は進化において不要だ。」

アイ「だから言わないって言ってるのよ。アンタ達になんか、絶対渡さないんだからっ！」

ゲルマ司令官「だったら好きなだけ苦しむがいいわ！」

アイ「んぶぶぶるぶぶるっ！！！」

アイ「ぶはぁッ！！ かはっ、ゲホッ！ゲホッ！ ンハア…ハア……」

そして何日かに一回、妊娠のケアと銘打った恥辱行為が行われる。

私のゴーグルはいつの間にか黒く塗り潰されていて、目隠し代わりに使われるようになっていた。

口には媚薬がコーティングされたボールギャグ、乳房には複数の低周波パットが電流を送り込む。

アイ「んふっ……ンッ…かはぁ………んんゝ うッ！！」

丸く切り抜かれたバトルスーツからは痛いくらいに勃起した乳首が剥き出しとなり、母乳が出やすくなるようにと、特製の電磁クリップが容赦無くその乳首を挟み込む。

アイ「んんんっ……んふっ…ンッ………んふっ！」

股間部分も切り抜かれ、乳首同様、ピンピンに勃起させられたクリトリスにも、特製の電磁クリップが牙を剥く。

強制的に開かされたオマンコには、極太のバイブがうねりをあげる。

ダメだ、またイキそう………

イッてもイッても終わらない強制的な快楽の拷問に、私はただただイキ続けるしかできなかった。

アイ「んんう！ンンンー！！んふううううううッ！！！！！」

そしてまた、拷問が始まる。

アイ「はうううう！！」

アイ「んああああッ！！」

アイ「くふうッ！！うぐっ……ハア…ハア……ッ！」

繰り返される拷問、お腹に植え付けられたプサックの命、逃れられない絶望……。  
日が経つにつれ、私の心はボロボロになっていく。  
地球のみんなを守りたい…その一心でここまで耐えてきたけれど、もう無理かもしれない。  
これ以上はもう……………。

ゲルマ司令官「さあ吐け。メラのダークコードを吐けば楽になれるぞ。さあ！」

アイ「……グズッ……ンッ………ダークコードは……………」

その瞬間、私の頭の中にある脳内無線が起動した。

『ai06s、ai06s、強制再起動を開始します。』

強制再起動…？

う、嘘でしょ、ちょっと待って。  
消さないで。  
私の記憶……………全部……………い……………や……………。

プツン。

## 【テキスト】

メラ星人の頭の中には、予め聞かされていないプログラムが組み込まれていた。  
全てはダークコードを守る為、脳内に仕掛けられた最後の防衛線。

彼女はあの時、ダークコードを伝えようと口を開いた。  
その脳の指令が、ラストプログラムを作動させたのだ。

その体から全ての記憶は消去され、まるで抜け殻のように ai06s はその場に立ち尽くした。  
その後、ai06s がどのようなになったかは、データとして存在していない。

私は銀河系 N805 第三惑星「メラ」から地球に送られてきた、地球語で言う所の“宇宙人”  
…になるのかな。

でもね、悪い事をしに来ているわけじゃないの。

みんなを守る為に、この地球の平和を守る為に、重要なミッションを抱えてこの星に派遣  
されている。

私の名は『ai06t』。

ジャパーナ名は『ミウラアイ』。

アイ「今度は、負けないから。」

ai06s 〜アイノユクエ〜